夜渡～懐かしき夏祭りの痕跡～

夜渡は、暑い夏に負けぬ健康と豊穣を祈願する祭りです。7月下旬から9月中旬にかけて田主丸の多くの神社で行われます。昔は、神事とともに暑気払いを兼ねた夜祭りがありましたが、今では神事だけのところがほとんどです。

夜祭りの名残りで、今も夜渡の日には大小の提灯や行灯を境内と社殿に飾ります。宵になると火を灯し、氏子が社殿にお籠りするところもあります。昔は、がめの葉で包んだ「夜渡まんじゅう」も作りました。

SDGs POINT

地域が楽しくひとつにつながる日

50年以上前まで、夜渡の夜には、どこの神社でも青年団が中心になって夜祭りを開きました。提灯に照らされた境内にはたくさんの夜店が並び、舞台で歌謡ショーがあったり、境内に幕を立てて映画が上映されるなど、子どもから大人まで一緒になって楽しみました。

この他にも、子どもの奉納相撲などが行われ、夜渡は人々のつながりを深め、地域社会をまとめる機能を果たしてきたのです。

▲善院天満神社（令和3年9月）

▲吉田町素盞嗚神社（令和3年7月）

神迎えの堂籠り～夜の境内に燃える迎え火～

11月30日の宵、田主丸の多くの神社では一斉に大きな火が焚かれます。これは旧暦10月（神無月）に出雲大社へ出かけていた神様が戻ってくるのを迎える神迎えの火です。昔は焚き火が消えぬよう男児が社殿に籠り火の番をしたので「堂籠り」と呼ばれます。

神社によって薪の組み方が異なり、境内の木に達するほど大きな焚き火が焚かれるところもあります。地域一帯で焚き火が燃え上がる風景は、田主丸町と近隣のうきは市ならではのものです。

SDGs POINT

祭りを担い地域と繋がる子どもたち

昔の堂籠りは、男の子たちが数日前から家々を回り、薪やお菓子、ご祝儀を集め、当日は参拝にきた大人たちを接待しました。堂籠りを通じて、地域社会の一員であることを学んだのです。現在は、少子化と安全性を考慮して大人が行っています。昔の名残りで、場所によっては今も、男の子と女の子が一緒になって焚き火を点火したり、子どもが参拝者に御神酒を注いでお菓子を渡します。

▲柳瀬玉垂命神社（令和4年11月）

▲麦生矢倉八幡宮（令和2年11月）

厄除け風止め～今も変わらぬ自然への畏怖～

風止め祭は、風鎮祭、厄神斎風止め祭とも呼ばれ、6月末から7月にかけて行われます。農作物が大風大雨の自然災害に遭わぬように、梅雨時期の田植えで疲れた体を壊さぬようにと祈願します。神事では厄除け風止めの御札や御幣柱という厄除け柱がお祓いされ、それらを氏子が地区境に立てていきます。地域によっては、風止め祈願の旗を境内の木の先に掲げます。自然への畏怖の念と生きるための願いは、昔も今も変わりません。

SDGs POINT

空に祈り大地に願う
～地域や時代とともに～

風止め祭のやり方は地域によって違います。御札を御幣に挟んだり、御幣柱を作ったり。立てる場所も道端や民家の敷地内など、さまざまです。旗の揚げ方も昔ながらに木登りをする所もあれば、クレーンを使う所も。中には、宮司が引いた籤の内容を氏子が行うという珍しい決まりもあります。神事も地域や時代で変化することが実感できます。

▼中舎館天満神社（令和3年7月）

口高黒島神社（令和3年6月）▶

獅子舞／獅子打ち～家内安全を祈り家を巡る～

家々を巡って家内安全を祈願するのが獅子舞や獅子打ちです。獅子舞は決まった振り付けを舞います。柳瀬おくんち獅子舞は、市の無形民俗文化財に指定されています。打ち込みとも呼ばれる獅子打ちは「祝いましょ!もひとつせっ!祝って三言!」と筑後地方独特の三本締めをしながら獅子の口を噛み鳴らします。

獅子打ちをした玄関先では、ご祝儀にあたるお花をもらい、時には飲食の接待も受けます。中学生以下の「子ども獅子舞」では、各家に御幣や短冊飾りを配ります。

SDGs POINT

担い手不足により風前の灯火

かつて獅子舞や獅子打ちは、多くの神社で行われていました。重い獅子頭を操り家々を巡るため若い力が必要ですが、少子高齢化の影響を受けて、今ではほとんど残っていません。無病息災を願って獅子が子どもの頭を甘噛みする光景に象徴されるように、地元に住む人々をつなぐ重要な役割を果たしてきた祭りをどうやって残していくのか？地域にとって大きな課題です。

▲麦生矢倉八幡宮（令和2年7月）

▲柳瀬玉垂命神社（令和4年10月）

町祝い（ゑびす様）～商売の街の面影～

現在の田主丸中央商店街は、江戸時代初期に在郷町として開かれ、商業地として繁栄しました。町祝い（ゑびす様）は、この付近一帯の各自治会によって、成人の日前日の日曜日(以前は1月15日)に商売繁盛と家内安全を祈願して行われます。

神事は、道端のゑびす像や自然石、公民館に飾った石像や掛け軸のゑびす絵を前に行われます。その後、公民館などに氏子が集まり「町祝い」という祝宴を行います。商売の神様・ゑびす様の神事がこの時期に集中するのは、田主丸中央商店街を含む中心部だけです。

SDGs POINT

賑わいを反映する町のお祭り

数十年前までは「廿日ゑびす」が田主丸を象徴する祭りでした。自治会や商工会などがドンタクを結成し、仮装行列で商店街や国道を練り歩きました。子どもたちがゑびす様を辻々に持ち出す「子どもゑびす」も風物詩でした。商店街の賑わいが無くなるにつれ「廿日ゑびす」は消え去り、「子どもゑびす」は中舎館地区や口高地区などに残るのみです。

▲元町町祝い（令和4年1月）

▲中舎館公民館（令和3年7月）

虫追い祭～稲作とともに300年続く伝統行事～

平家物語に出てくる武将2人と大馬の人形が入り乱れて戦う、江戸時代からの伝統行事です。斉藤別当実盛が稲株に引っかかり転んだところを手塚太郎光盛に討ち取られ、稲を食べる害虫「サネモリ虫」になったとの言い伝えが元になっています。昔は、虫害が出ると藩の許可を得て村ごとに行いました。現在は3年に1度、JAにじ田主丸地区青年部の主催で11月に行われます。早朝の田主丸天満宮の出陣式から、巨瀬川での夜の大合戦まで1日かけて各所で祭りを披露します。

SDGs POINT

稲の害虫駆除が全国唯一のお祭りへと昇華

全国で行われた虫送り・虫追いは、本来は夜間に松明の火で稲の害虫を焼き払うのが目的でした。しかし、田主丸のような、武将の大人形を戦わせ、大馬を繰り出す虫追い祭は全国でも他に例が無く、民俗学者の柳田国男も注目したようです。

大切な伝統行事を継承するため、田主丸小学校でも1980年代頃から運動会で虫追い祭を披露しています。

▲いずれも巨瀬川 夜の大合戦（令和元年11月）